

目と耳でおぼえる日本語

はじめまして

高柳 和子編



TIJ東京日本語研修所

繪本學級圖書分類法



繪本學級圖書分類法



繪本學級圖書分類法

『はじめて』の使い方

—— 会話の指導 ——

高柳 和子

TIJ東京日本語研修所

目 次

— 1 —

I. 『はじめまして』が使われる場	3
1. 生活面での支援	
2. 言葉の支援	
3. コーディネーション	
II. 『はじめまして』の役割	5
III. 学習希望者の状況とテキスト	5
1. 共通語と文字がないことについて	
2. 参加者の顔ぶれとレベルについて	

— 2 —

I. テキストの構成と使用上の注意	8
1. タイトルの 8 ヶ国語訳が果たす役割	
2. 場面と言葉	
3. 「きつぷをかう」という場面での会話	
4. 会話の基本の部分	
5. 基本会話から自然な会話へ	
6. ついた力を検証する－教室内で行う会話活動	
II. クラスへ出るときに注意すること	15

I. 『はじめまして』が使われる場

日本語ボランティアの仕事は、日本で生活している外国人が、地域社会で、人間らしい生活が送れるよう、いろいろな角度から支援活動を行うことです。

まず、このテキストが、日本語ボランティアの活動のどの部分で使われることを目指して作られたかをはっきりさせておきたいと思います。

1. 生活面での支援

ボランティアが提供できるサービスは大きく分けて二つの種類があります。

一つは、日常生活の中で、日本語がわからなかったり、生活習慣が違ったりすることから生じてくるさまざまな不利益や問題について相談にのることです。

例えば、学校や幼稚園のお知らせが読めない、一人では病院へ行けない、話し相手がいない、日本語がよくわからないために家族としっくりいかない、職場で差別されるなど、学習者が個別に抱えている問題に対応することです。

もちろん一ボランティアが問題解決に全責任を負うことなどできるはずがありませんが、同じ地域の住民ですから、適切なアドバイスができることも数多くあると思います。しかし、時間的にも能力的にもボランティア個人では対応しきれない問題がたくさんあります。その場合は、解決を委ねられる適切な人または窓口がわかるよう、日頃ネットワーク作りを心掛けていくことが大切です。

さまざまな外国人との接点であるボランティア教室は、彼らが直面している問題を一番敏感にキャッチできる場なのです。彼らの目を通すことで、日本人や日本社会が持っている特性や問題点が浮き彫りにされて見えてくる所でもあります。

日本語ボランティアは、活動を通して問題を把握し、自分が住んでいる地域を外国人にも住みよい所にするために何をするべきか、地域の人々や関係機関にいろいろと提言していく立場にもあるわけです。

2. 言葉の支援

もう一つのサービスが、日本語の指導です。言葉がわかれば、自力で解決できる問題がたくさんあります。また、職場でも、地域社会でも、思っていること、考えていることを自由に表現できないと、対等な人間関係を結んでいくのがむずかしいと思います。日本で暮らしていく上で一番の武器は、何とんでも日本語を身につけることであるのは誰にとっても自明のことです。自立を助けるための系統的な日本語指導、これがサービスのもう一方の柱です。

3. コーディネーション

二つのサービスを薬に例えれば、前者は、症状に合わせた即効性の特効薬のようなもので、その場を切り抜けるための特別な手当てです。後者は、抵抗力のある体質を作ることを目的とした漢方薬のようなもので、事に対応できる潜在的な力を育てるために、長期の展望にたって調合されるものです。

前者を生活面での支援、後者を言葉の支援と呼ぶとして、日本語ボランティアは、個人あるいはグループで、両方の役目を果していくことが必要です。

二つのサービスは、健全な市民生活を目指すということで、目的は一つなのですが、混同すると、焦点の定まらない支援になってしまいます。また、どちらか一方に偏っても、根本的な状況の改善は期待できないでしょう。

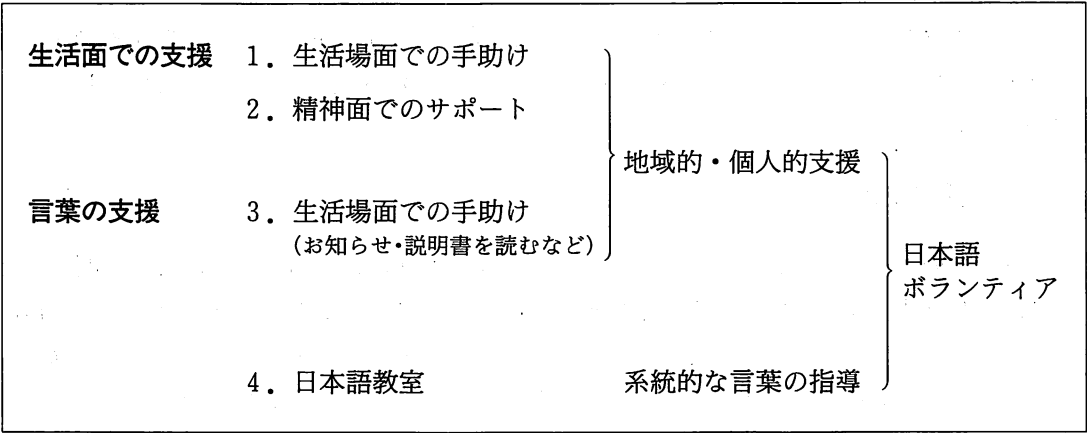
今現在感じている苦痛を取りのぞかなければ、体質を改善しようという意欲など湧いてきはしません。とにかく苦痛を取り去ることが先決で、そうすれば体質改善をしようという余裕が出てきます。体質が改善されれば、苦痛を惹きおこす要因がへるという好ましい循環が生まれます。

日本語ボランティアが行う、生活面での支援と言葉の支援という二つのサービスも、これと同じような関係にあります。二つの支援活動が、補足しあってよい効果を生むよう、慎重にコーディネートされたとき、ボランティア教室は、地域の外国人にとって本当に価値のある場所になると思うのです。

ボランティア各人は、活動全体をよく理解して、自分がどのような持ち場で奉仕できるかを判断しなくてはなりません。

テキスト『はじめまして』は、下の図のように計画された日本語ボランティア活動の、言葉の支援のうち、4. の日本語教室の入門期に使われることを意図して制作されたものです。

日本語ボランティア活動の全体



II. 『はじめまして』の役割

系統的に計画された指導の、最初の段階で使われるテキスト『はじめまして』は、「名前を言う」「切符を買う」「店の場所を聞く」といったような、生活の中の小さい部分を取り上げ、それを一つの章にまとめてあります。

教室は、学習者が、例えば「切符を買う」という一つの行動を日本語で行えるようになるための訓練を行う場所です。

具体的には、学習者に、その行動を行うのに必要な部品を与え、部品の組み合わせ方や使い方を教えた上で、目的の行動がスムーズに行えるようトレーニングをする場所です。支援者は、先生というよりは、コーチとトレーナーの役割を果す存在だと自覚するべきでしょう。

与える部品の中には動詞や、助詞や、数字や、いろいろな物の呼び方（名詞）などがあります。必要な部品をどう組み合わせ、どう使えば、社会で対人的に効力を発するかを教えるのがコーチの仕事です。

しかし、言葉を知識として理解しただけでは決して話せるようにはなりません。それは、泳ぎ方の理論を教わっただけでは泳げるようにならないのと同じです。大切なのは練習です。水泳に泳ぐ事が大切であるように、会話では口を開いて音声練習をすることが大切です。与えられた部品を使いこなして、駅で切符が買えるところまで学習者を仕立て上げるのがトレーナーの仕事です。

外で実際に行動する前に、教室内で模擬的に会話をしてみる（ペアー・ワークなど）も大切です。そうすれば、コーチもトレーナーも自分の指導の間違った点や、練習が足りない部分に気がつくでしょう。学習者も、自分には何が足りないかが実感できるはずです。

『はじめまして』は、各章で、生活に身近な場面を取り上げ、その場面を日本語で行動するための「部品から教室内活動まで」のプログラムを絵と音声教材で提出したものです。

学習者は、一回参加すれば必ず具体的な会話の「実技」が身につくということに気がつくでしょうし、支援者は、知識としての言葉の指導と、実技をつけるための言葉の指導の違いに気がつくと思います。

III. 学習希望者の状況とテキスト

ボランティア日本語教室に集まってくる学習者のうち、『はじめまして』の対象になるような人たちには次のようなことが予想されます。

- * 国籍が多様で、支援者との間に共通語がない。
- * 文字は、ひらがなもまだ読めない。
- * 日本語の音声にも慣れていない。
- * 入門といっても参加者のレベルに差がある。

*クラスの参加者が毎回変わる。

1. 共通語と文字がないことについて

ここで、日本語ボランティアの指導目標である、外国語（今の場合日本語）が使えるようになるというのがどういう状況を指すかはっきりさせておきたいと思います。

人間の頭（心？）の中には、周囲の状況に刺激されて、疑問とか印象とか意見とか欲求とか、表現のもととなる様々な発想が、絶えず浮かんだり消えたりしています。発想は、頭の中に母語で描かれたイメージですから、それを人に伝えようと思った場合、母語でなら直ちに表現することができます。

外国語が話せるというのは、母語以外の言葉で、自分の発想を自由に表現する力をもつということです。

どうすればその力がつくかを、自分の外国語体験（英語）で考えてみましょう。例えば、英語で話をしているとき、言いたいことが頭に浮かんでいるのに、どうしても適切な表現がわからなくて言葉につまることがあります。そんな時、そばにその言葉を母語とする人（ネイティブ・スピーカー）がいて、言えない部分を補足してくれれば、その表現は確実に身につくと思うのです。話の流れ（場面）ができていると、表現したいのにできないでいるイメージが何であるか、そばにいる人にもはっきり見えますから、ネイティブならその部分に適切な表現を与えることができますし、補足してもらった人は、その表現を確実に身につけることが可能になるのです。

外国語を指導するとき、まず必要なのは、学習者と指導者が、表現のもとになるイメージを共有することです。そのイメージに言葉を与えていくのが指導する側の仕事です。つまり、上に述べた外国語体験のような、はっきりした場面を人工的に作り出し、それに表現を与えていくのを助けるのがテキストの役目です。

会話の入門テキストである『はじめまして』は、絵でイメージを作り、それに音声テープで表現を与えていくものですから、学習者と支援者の間に共通語がなくても、学習者が文字を知らなくても、両者がイメージを共有することには差しつかえないわけです。

『はじめまして』は、文法の内容、例えば、いくつかの助詞の基本的な使い方も、視覚的に与えることを試みました。

2. 参加者の顔ぶれとレベルについて

参加者の顔ぶれが毎回変わったり、レベル差のある学生が一つのクラスにいるのは、日本語教室では日常のことです。この避けられない状況は、テキストや、教え方、カリキュラムの組み方など、多角的な工夫で対処していかなければなりません。

『はじめまして』は、先に述べたように、各章（課の場合もある）が、日常の小さい場面を扱った独立したユニットになっています。学習者は、毎回一つか二つの生活場面を、日本語でこなす実技を身につけていくわけです。言うなれば日替わりメニューですから、その日来

た人はその日のメニューをこなせばいいわけです。参加回数が多ければこなせる場面の数が多くなるという原理になっています。

とは言っても扱う素材が言葉ですから、全ての人が同じようにこちらの意図通り上達していくことは望むべくもありません。参加者の中には、既に他の外国語をマスターした経験のあるような人もいるでしょうし、そもそも教育を受けたことがないという人もいるかもしれません。いろいろむずかしい条件があるので、現在のところ、日本語の支援は、個別に指導するという形がとられがちなのでしょう。しかし、個別のケアは、ボランティア活動の全体図（P.4）の中の、1. から 3. の機能しか果たすることができません。ボランティア教室にやって来る人は、確かに個別の支援も必要としています。しかし、日本語ボランティアという名称があれば、系統的な日本語の支援も受けられるという期待をもってくる人も多いのではないのでしょうか。

日本語ボランティアの活動が、最終目標として、学習者の自立を保証することを目指すのなら、1. から 3. の支援に加えて、系統的な指導を行う 4. の日本語教室を持つことを目標として定めるべきでしょう。

日本語の教室は、そこに参加すると、日本語を使って社会に出ていく勇気と力が湧いてくるような場所でなければなりません。クラスのペースについていくのがむずかしい人たちにあらかじめ個人的な指導をしたり、アフター・ケアをしたりできるのが日本語ボランティアならではの素晴らしいシステムではありませんか。そうやって、全ての参加者を、いろいろな人と日本語を交わすことができる教室に押し出してあげるべきだと思いますし、日本語教室をそれに価する場に作りあげていくのがボランティアの目標であり責任でもあると思います。

このような日本語教室を実現するには、ボランティアグループのメンバーが、共通の指導内容（カリキュラム）と指導法を持って、連携できるようになることが必要で、それが「系統的な指導」ということばが意味していることなのです。

出席者のメンバーが毎回入れ替わるような教室で、自立を支援するという質の高い目標を具体化するには、相当の工夫と努力と、何よりも、大勢の力の結束が必要だということです。

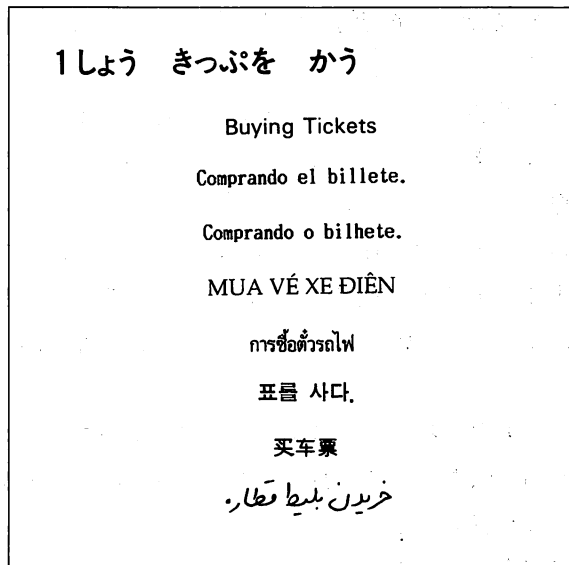
— 2 —

I. テキストの構成と使用上の注意

これから、5か「でんしゃに のりましょう」の1しょう「きつぷを かう」を例にして、テキストがどのように構成されているか、指導上どんな点に留意したらいいかについて述べていきます。

1. タイトルの8ヶ国語訳が果たす役割

各課の最初のページにある、課と章のタイトルを見てください。



上の例のように、タイトルにはそれぞれ8ヶ国語——上から順に、英語・スペイン語・ポルトガル語・ベトナム語・タイ語・韓国語・中国語・ペルシャ語——の訳がついています。同じページには、トピックに関連のあるカットもいくつかついています。これは、これから行う会話の場면을学習者にイメージしてもらうためのものです。

前にも述べましたが、言葉は人の頭の中のイメージと結びついて存在するものですから、会話の勉強をするときには、まず会話のもとになるイメージを学習者の頭の中に作らなければなりません。訳語とカットは、クラスに集まってくる様々な母語の人たちに、共通のイメージを持ってもらう役割を担っているのです。

2. 場面と言葉

5課は、電車に乗るために行う行動の中から「きつぷを かう」「のりばを きく」「でんし

ゃを かくにんする」という三つの場面を取り上げ、そこで行われる会話を身につけることを目指しています。

テキストが取りあげている場面と会話に対して、使って指導する人たちは、いろいろ問題を感じたり、疑問をもったりするものです。

例えば、人は電車に乗るためにはもっと複雑な行動をしている、電車に乗り込むところまででは不親切だ、私はこの場面でこんな表現は使わないなど、テキストが現実と違うのではないかという指摘が出てくるのです。

確かに、電車やバスに乗るとき、場合によっては、かなり複雑な行動をとることが必要です。しかし入門の段階で、学習者が使いこなせる日本語はわずかです。必要だからといって、無差別に教え込むと消化不良を起こしてしまいますから、どうしても「複雑な外出」をしなければならない場合は、個人的な手助けに頼るのがいいと思います。

「でんしゃに のる」という行動を、系統的に指導するためには、まず、電車に乗るための一連の行動を整理して「きっぷを かう」「のりばを きく」というような小さい、わかりやすい場面に分けます。そして、それぞれの場面に会話を用意して、役にたちそうなものから順に提出していくのです。

会話には、日常使っている、生のことばをそのまま使うものではありません。言葉も、場面と同様よく整理して、できるだけシンプルで、効率よく目的を果せる会話を用意します。整理された場面に、整理された会話を添えて提供するのがテキストの役割です。

ハンバーガーの店や、ファミリー・レストランへ行くと、客を迎えてから送りだすまでの一連の行動の流れ図（フローチャート）ができていて、ポイントポイントで客に言うせりふがパターン化して用意されていることがわかります。テキスト作成の、基本的な考え方はこれと同じです。但し、レストランで注文をとるのは、双方通行の会話だと思うのですが、となく対応が機械的で一方的な感じを与えるのは、用意された言葉がよくないからか、その言葉を使っている人が、相手の人格を無視しているからだと思います。

このように、日常、無意識に使っている母語としての日本語を、客観的に意識化して、外国人が習得しやすいように整理したものを、外国語としての日本語と呼びます。

テキストの中の場面も会話も、使いやすいように整理されたものですから、現実と違うという感じがあるのは当然のことなのです。

3. 「きっぷを かう」という場面での会話

タイトルや絵に刺激された学習者の頭の中には、「行き先までの料金を聞く」という、この章の目標の行動をめぐって、次のような場面がイメージされています。

- *誰かに声をかけて呼びとめる。
- *料金をきく。
- *相手が料金を言うのを、聞き取る。
- *よくわからなかったら、聞き返す。

*不安だったら確認する。

*相手の言うことがわかったときはわかったと言う。

*礼を言う。

母語でなら、瞬時にイメージを言語化して、次のような会話を交わすことができます。

ステップ3



れい A : あのう、うえのは いくらですか。

B : 150 えんですよ。

A : あ、そうですか。どうも。

1 A : すみません。あきはばらは いくらですか。

B : あきはばらですか。ええと、120 えんです。

A : あ、120 えんですね。どうもありがとうございます。

2 A : あのう、しんじゅくは いくらでしょうか。

B : しんじゅくは 190 えんですよ。

A : そうですか、どうも。

B : いいえ。

3 A : すみません。かまくらは いくらですか。

B : かまくらですか。かまくらは 880 えんですね。

A : 800...

B : 880 えんですよ。

A : あ、そうですか。ありがとう。

4 A : あのう、なりたこうこうまで いくらですか。

B : なりたこうこうは 1260 えんですよ。

A : え、いくらですか。

B : 1260 えんですよ。

A : 1260 えん。

B : ええ、そうです。

A : どうも。

どの章も、ステップ3に章の中心である会話が収められています。音声テープに録音されていますし、巻末には文字でも収録されています。しかし、テープを聞かせたり、ダイアログを読ませたりした上で、質問をして内容を理解させ、その後、テープの通り繰り返す練習などさせても、決して会話の力は身につきません。

では、身につく会話の指導はどうすればいいのでしょうか。どこから手をつけるか、手順を決めるために、目標の会話を分析してみましょう。

4. 会話の基本の部分 (以後、基本会話と呼ぶ)

前ページの五つの会話の下線部分を見てください。「行き先の駅までの料金を聞く」という会話の中枢部分です。まず、この基本の部分を習得することから始めます。その部分だけ抜き出すと、次のようになっています。

- れい A : うえのは いくらですか。
B : 150 えんです。
- 1 A : あきはばらは いくらですか。
B : 120 えんです。
- 2 A : しんじゅくは いくらでしょうか。
B : 190 えんです。
- 3 A : かまくらは いくらですか。
B : 880 えんです。
- 4 A : なりたくこうまで いくらですか。
B : 1260 えんです。

基本会話は下線を引いた「固定された部分」と、それ以外の「状況によって変わる部分」からなっていることがわかります。

固定された部分は、(料金を聞く) (料金を言う) という機能を担った二つの文型です。
(.....部分はバリエーション)

ステップ2



- A : (行き先の駅名) は いくらですか。
B : (料金) です。

状況によって変わる部分は (行き先の駅名) と (料金) です。駅名と料金には次のものが使われています。

ステップ1



- 1 行き先の駅名 うえの・あきはばら・しんじゅく・かまくら・
なりたくこう
- 2 行き先までの料金 150 えん・120 えん・190 えん・880 えん・1260 えん

テキストを見ればわかりますが、学習の手順は、分析の逆を辿っています。

分析は、会話から基本会話を抽出し、基本会話を、固定された部分と、状況によって変わる部分に仕分ける作業でした。

学習は、会話の一番小さい部品である変わる部分から始めて、基本会話を完成し、最後に、目標の会話へと進みます。

【指導するとき注意すること】

1. それぞれの絵の下のは、聞き取った音を書き込むところです。表記には何を使っても構いません。大人の学習者にとって、聞いただけでおぼえるのは、なかなかむずかしいことですから、音の記憶を助けるメモをとる場として用意しました。しかし、イメージを直接音声で表現するのが会話です。メモを書いたばかりに、文字に頼るようになって、読まないと発話できないという癖をつけないように気をつけてください。
2. ステップ2の基本会話は、二つの文型を組み合わせたものです。文型が使えるようになるには、入れ替え練習（いわゆるパターン・プラクティス）をする必要があります。練習の際の入れ替えの言葉（キュー）には、ステップ1に提出された語彙（文のこともある）を使いますから、ステップ2に進むためには、ステップ1の口頭練習を十分にしておかなければなりません。二つの文型がスラスラ言えるようになったら、組み合わせて基本会話を練習してください。
3. 基本会話は、学習者にペアーを組ませて練習させてください。途中でA Bの役を交代させ、聞く方と答える方と両方練習するようにします。先生が質問をして、生徒が答えるという教え方を繰り返していると、自分からは話を始められない、答えしかできない人を育ててしまいますから、学習者にペアーを組ませる習慣をつけましょう。
4. ステップ1に提出されている語彙（文）の数が少ないし、何でこんなつまらない語彙を選んだのだという指摘がありそうな気がします。

このテキストの主眼は、あくまで会話のすすめ方を身につけることです。語彙や、単文をたくさん覚えただけでは、決して会話ができるようになりません。しかし「会話の型」が身につくと、その中に自分の言葉を入れて、自分の会話ができるようになります。ステップ1に提出された、ありふれた語彙の後ろには、学習者自身の言葉が、出番を待って並んでいるのです。

ステップ1は「状況によって変わる部分」でしたが、それは「発話者が自由に自分の言葉に入れ替えられる部分」と言い換えることができます。それなら、ステップ1は初めから空欄にしておけばいいという考え方もありますが、いくつかの語彙（文）を提出しているのには二つの理由があります。一つは、そこにはどんな種類（カテゴリー）の言葉が入るかを示すこと、もう一つは練習の際の入れ替えの言葉（キュー）の役割を果たすことです。「会話の型」が身につくまで、暫定的に使うものと考えてください。

このように、ステップ1に出ている言葉は、すぐにも発話者自身の言葉に置き換えられる運命にあるわけですが、上に述べたような役割に合うよう「どんな種類（カテゴリー）

の言葉かはっきりしている」「覚えておけば後で使う可能性がある」「口頭練習をするとき音声上の負担が少ない」というようなことを基準に選びました。

5. 口頭練習は、会話を行う上でとても大切ですが、いったんついた発音の癖は直りにくいものですし、人の前で個別になおしても、効果は期待できません。いい音で話したいという気持ちがないときに、発音練習をさせることはほとんど無意味です。一人一人が目立たないよう、しかし日本語の音はできるだけ何回も口にするよう、学習者全員が声をそろえて言う練習（コーラス）で手際よい練習をさせられるようになったら、教える力が相当ついたと言えると思います。

5. 基本会話から自然な会話へ

ここまでで、基本会話は習得できました。用は足せるかもしれませんが、まるでロボットの会話のようです。もう一度ステップ3の五つの会話を見てください。下線をひいた部分が基本会話です。そうすると、下線のないところが、基本会話を自然な会話にする環境を作っている部分であることがわかります。

どんな言葉が、どんな機能を果しているのか見てみましょう。

*あのう／すみません	声をかける
* (150 えんです) よ	情報をしっかり渡す
* (あきはばらです) か	聞き返す
* (120 えんです) ね	確かめる
* どうも／ありがとう／どうもありがとうございます	礼を言う
* あ、そうですか／そうですか	了解したことを伝える
* ええ、そうです	請け合う
* ええと	間を持たせる
* 800…	いいよどむ
* えっ	わからないというサイン

こんなにたくさんのニュアンスにとんだ表現といっしょになって、基本会話は自然な会話になるのです。終助詞「よ・ね・か」の使い方など、説明してわかるものではありません。しかし、大人の学習者は、母語ではこうしたニュアンスといっしょに言葉を使っているわけですから、テープを何度も聞けば、声の調子などから、それぞれの言葉のもつ働きが次第に理解できていくものです。しかし、積極的に注目させなければ、いつまでも気がつかないものもあります。繰り返しテープを聞いて、リピートをして、文法中心の基本会話が生きる場を育ててください。

【指導するとき注意すること】

1. 外国語を学習するときのタイプとして、ステップ2までのような学習が得意な人と、ステップ3のような部分に敏感な人がいます。前者は文法に強く、正確ですが話すのが苦手、後者は一見話せるようで、実は論理的に話を進めることが得意ではないという場合があります。両方をバランスよく指導することが大切ですが、基本会話が何ととっても基本ですから、ステップ2までを確実にしてからステップ3に進んでください。
2. ステップ3には、情報を聞き取る課題がついていますが、情報をとるのが目的ではなく、何度もテープを聞いて、会話を観察することが狙いです。

6. ついた力を検証する ― 教室内で行う会話活動

ステップ4



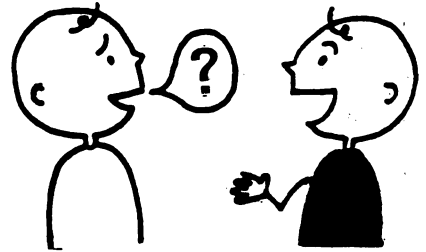
ステップ3まで終わったら本当にその章の会話が身についたかどうか、必ず検証してください。



二人一組で勉強した会話をやってみるためのペアー・シートか、勉強したことを使って、いろいろな人に質問するためのインタビュー・シートが用意されていますから、それを使って会話をしてください。

【指導するとき注意すること】

1. ペアー・シートは白い人と黒い人の二枚でできています。白い人のシートには情報が入っていません。黒い人の方には入っています。二人一組になって、白い人が黒い人から情報を取るための会話をしてください。ステップ3までを理解して、口頭練習がしであれば、簡単にこなすことができます。うまく行かない場合は、どこでつまづいたかをチェックして足りない所を補ってください。



2. 学習者によって、文法がわかっていない、会話のテクニックがこなせていない、口頭練習がたりないなど、それぞれ違った弱点のあることが見えてくると思います。みなが同じようにできることは期待しないほうがいいと思います。成果はその人なりで構わないことにして、とにかく会話活動をするように励ますことが大切です。要領を覚えれば、テキストとテープを持って、系統的に予習、復習ができるわけですから、会話をするのが楽しいという雰囲気が教室にあれば、自分で勉強してでも参加しようという気になると思います。
3. クラスワークを手伝ってくれる日本人がいて、学習者が、勉強した会話のパターンで実

際のやりとり（ペアー・ワーク）をしてみると日本人とペアーが組めると、とても効果が上がります。系統的な日本語指導を展開するためには、同じ理念で、同じ教え方のできる仲間がふえていくことが必要なので、複数のボランティアがクラスに参加するスタイルはその目的のためにもボランティア日本語教室でなら実現できる理想的な形だと思います。

II. クラスへ出るときに注意すること

『はじめまして』は会話のテキストです。学習する会話に必要な文法と、音声をしっかり指導するのが目的です。準備するとき、あるいは教室で注意すべき点をいくつかあげておきます。

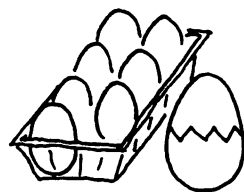
1. ステップ3の会話が各ユニットの学習目標です。クラスへ出る前に、巻末の文字化されたダイアログとテープを使って、会話の構造(基本会話とそれ以外に分ける)、基本会話を構築している文法と語彙、テープの音声伝えていいる意味を把握してください。
2. ステップ4のペアー・シートを見て、学習者が会話活動を行っている様子を想像し、その活動に参加できるように指導するのだという気持ちをしっかり定めてください。

3. クラスではステップ1の絵を音声化することから始めます。絵の日本語を教えるという姿勢ではなく、絵を楽しむという姿勢で臨んでください。わずかの日本語でもコミュニケーションは楽しめます。ちなみに上野駅の西郷さんの絵(P.17)を見て「サムライ！」と叫んだ学習者がいます。楽しいクラスでした。

絵を見て受ける印象は、人によって母語によってちがいます。卵の8個入りのケースの絵(P.76)には「タマゴ」という音声が入っていますが、単数複数の別のある母語の人は単数の場合は何というのだろうかと思うかもしれません。

指導者に一番望まれるのは、学習者の頭の中が、今日本語で表現していることと一致しているかどうかを見抜く力です。相手の頭の働きにお構いなしにクラスを進めることは、言葉はイメージと結び付いて存在するという原則に反します。

指導者の資格は学習者の頭の中を見抜く力と、それに見合った文法を提供できる力をもつことで、それが相手のニーズに添うということの意味です。



4. テープレコーダーの使い方と、学生をペアーにして会話の練習をさせる力がつくと、クラスは非常によく回転するようになります。日本では会話の訓練を経験した人が少ないし、

教室設定をするとき、学習グループの声が邪魔し合うというようなことが配慮されることもあまりないようです。しかし、学習者が会話力を望んでいるのであれば、口頭練習（しかもコーラスで）のさせかたを工夫することを忘れないでください。

5. 自分の声をよく聞く癖をつけてください。先生のようにではなく、コミュニケーションをしている雰囲気が作れる声が出せるよう、日常の会話の中で自主トレーニングをしてください。

6. クラスの主体はあくまで学習者です。場面を設定し、必要なことばを用意して、会話活動が行えるよう周到なお膳立てをしてください。言うなれば、コミュニケーションの仕掛人になるのが指導する人の役目です。

テキストの内容や文法説明に終始して、学習者が声を発して表現活動を行う時間がなくなることがないように十分気をつけてください。

は じ め に

1992年の秋、TIJに、月に2回、第2・第4月曜に開かれる月曜会という会が発足しました。あちこちの地域でボランティアとして日本語の支援活動をしている人たちが集まってきて、教え方やグループの運営について話し合ったり、グチをこぼしたりする気楽な集まりです。この度、この会から一冊のテキスト『はじめまして』が誕生しました。

- * 会話の教え方がわからない。
 - * 共通語のない初心者のグループにはどうやって教えるのか。
 - * 毎回、出席者の顔ぶれが変わるクラスにどう対応したらいいのか。
 - * 日本語のレベルやニーズの違う学習者を一人で教えられない。
 - * とかく、文法の説明や、50音を教えるようなことに流れてしまう。
-
- * 共通語がなく、まだひらがなもわからない学習者に、生活の役にたつ会話を教えるにはどうしたらいいのだろう。
 - * 自分の考えや思いを表現するために必要な、しっかりした文法はどうやったら身につけてあげられるのだろう。
 - * 初めて支援活動をする人と、初めて日本語を習う人が、第一時間目から充実した時間をもてるようにはできないだろうか。

そんな問題に対応できる教材がほしいという切実な思いが、テキストを作ろうという原動力になりました。少しずつ、テキストらしい形がまとまると、現場へ持ち帰って検証をしました。多くの支援者の方々にも現場での検証をお願いしました。学習者の反応や、正すべき点を月曜会に集め、議論を重ねて誕生したのが『はじめまして』です。

地域での活動の知恵を結集したと言っていいと思います。

学習者自身の自由な「発想」に、撥刺とした「声」を与えよう——。

これが、まだ文字がないときも、文字を獲得してからも、ことばの支援を根底で支えていかなければいけない理念だと思います。『はじめまして』は、学習の第一歩で、この理念に基づいた支援が展開することを願って作られたテキストです。この理念が生きる「場」と、テキストを活かせる「人」が増えていくことを心から念じております。

1994年9月1日

も く じ

テキストの構成と使い方	6
1か じこしょうかいを しましょう	9
1しょう なまえを いう	12
2しょう く にを いう	14
3しょう すんでいるところを いう	17
2か ことばを あつめましょう	21
3か スケジュールを つくりましょう	27
1しょう じかんと きく	30
2しょう ぎんこうや スーパーのえいぎょうじかんと きく	34
4か やすいものを かいましょう	41
1しょう ねだんと きく	44
2しょう スーパーが どこにあるか きく	50
3しょう ほしいものが どこにあるか きく	54
5か でんしゃに のりましょう	59
1しょう きつぷを かう	62
2しょう のりばを きく	67
3しょう でんしゃを かくにんする	71

6 か	あさごはんについて アンケートを しましょう……………	75
7 か	にちようびについて はなしを しましょう……………	83
8 か	たのしかったことについて はなしを しましょう……………	89
	1しょう なにをしたか いう……………	92
	2しょう どこへいったか いう……………	100
9 か	はじめてのまちを しりましょう……………	107
10 か	しょうらいの ゆめについて はなしを しましょう ……	115
	ダイアログ……………	125
	ふろく……………	153

テキストの構成と使い方

このテキストは、テキスト本体と、とじ込み「この本の使い方」と、60分テープ1本からできています。

本体は、全10課からなり、各課は1～3の章に分かれています。

どの章も、絵から得たイメージを、テープのモデルにならって音声化していくと、会話が自然に体得できるようになっています。

タイトル

各課のタイトルは、その課で行う行動を示しています。

例 5か でんしゃに のりましょう

各章のタイトルは、その章を学ぶと何ができるようになるか示しています。

例 1しょう きつぶを かう

2しょう のりばを きく

3しょう でんしゃを かくにんする

タイトルには、8ヶ国語で対訳がついていますから、学習者は、何をしようとしているか目標をはっきり自覚した上で学習を進めることができます。

各章の構成



ステップ

1

→

2

→

3

→

4

会話に必要な部品

会話の基本の部分

会話のモデル

会 話

どの章も、最終段階のステップ4に、実際に会話を行うことを促す工夫（ペアー・シートやインタビュー・シート）が用意されています。

ステップ1からステップ3までを、絵とテープを使って順次、理解、練習すれば、目標の会話を行うのに必要十分な日本語が身につきます。

各ステップで行うべきこと



ステップ1には、目標の会話（例：切符を買う）を行うのに必要な語彙や文型などが提出されています。

語彙や文型は、会話を構成する部品にすぎませんから、これを覚えてただけではバラバラの知識が身につくだけです。

しかし、部品がなくては会話は成り立ちませんから、絵から得たイメージを、テープをモデルにして声に出して言えるようにしてください。

- 例 1. 行き先の地名 上野 新宿 横浜 など
2. きっぷの代金 120 円 1260 円 など



ステップ2には、会話の“基本の部分”が提出されています。

ステップ1の部品を使って声を出して練習してください。

- 例 A：(行き先の地名) はいくらですか。
B：(きっぷの代金) です。



ステップ3には、ステップ2で提出された“基本の部分”が実社会の中でどう使われているかが例示されています。

- 例 A：すみません。 かまくらはいくらですか。
B：かまくらですか。 かまくらは 880 えんですね。
A：800…
B：880 えんですよ。
A：あ、そうですか。ありがとう。

斜体部分の“呼びかけ、聞き返し、確かめ、あいづち、礼”などが加わって初めて、下線の“基本の部分”は生きた会話になります。

ステップ4で行う会話のモデルですから、よく聞き、観察し、練習して課題がこなせるように準備してください。



ステップ4には、課題の会話を促すペアー・シートやインタビュー・シートが用意されています。それを使って実際に会話を行ってください。

付 録

このテキストの狙いは、課題の会話を行うことです。各章にはそれに必要十分な語彙が提出されていません。語彙の補足は巻末の付録で行ってください。